

◆特集 春闘は生きている

コロナ禍の労働者の実態

元私鉄労働者 小林 精一

これからユニオンが果たすべき役割

『月刊まなぶ』21年11月号の瀬戸大作さんの報告にあるように、生活保護を申請するのに躊躇させる実態があります。

日本の労働組合の大組織である連合は闘いを放棄しているような実態があるため、組織内で闘いきれない労働者がいることでその手助けをだれが取り組むのが大きな障壁としてあります。このように、たたかいがないから、ユニオンなどが困っている人、闘いをどのように取り組むのか、私たちユニオンがお手伝いし、取り組んでいるのが実情です。

これまでの闘いが積み上げ、勝ち取った権利・慣行を自分のものにしていく、というのが今日では働く人々に根付いていません。権利とは何かを意識できないよう

な職場実態、労働者支配が厳然と立ちはだかります。闘いをしたくても立ち上がれない、権利を主張したくても主張できない、ところが、もつと極端に言いますと「闘いも、権利も」意識できない労働者が多くを占めているといってもよいでしょう。よく、「権利に眠るものはこれを守らず」と言いますが、これをもつともつとみんなのものにしていく。このことを大事に思えない働く人々に呼び掛け、共に決意しながら小さな団結を作っていくことが私たちユニオンの果たすべき役割とと思っています。

具体的に言うと

例えば、時給1500円要求する意義とは何か、と
いうことが相談できる場所と人が必要です。

「現在の時給では生活できない」とかの「生き続け

ることの苦しみ」をとか、人間として生活していく最低限のものにしていくようなか、という実践が大小にかかわらず日本の労働組合の運動では少なくなっています。

21年12月号や22年1月号でも特に特集の記事に出ていましたが、コロナ禍で労働者のおかれた実態を再認識していく必要性を改めて感じます。そのような実態になっ
ていません。しかし、日本国民は「憲法25条」で「健康で文化的な生活」を国家から保障されているから
です。「春闘」という言葉は残っていますが、実態は大きく格差拡大の中に埋もれています。非正規労働者や個人
事業主化された中では「要求」の意義すら奪われる労働環境の中で働かされています。

実態がそのような中で、私たちが奪われて久しい、政治的要求になるのでしょうか、「権利」「健康」「職場の崩壊」などといった課題を闘えない働く仲間と共に行動することが大切と考えます。

問題は隙間を埋める労働者

過日、さいたま地裁で不当な差別攻撃で闘っている小林正昭さんを傍聴してきました。

朝8時からの地裁前のチラシ配布と裁判傍聴も合わせて参加しました。

ユニオネット埼玉の織戸副委員長も「皆さんに助けてもらった」と言っています。

彼は、今は「ワーバード」の仕事をしています。織戸さんが言います。「正規、非正規とか、これまでの労使関係も私たちには関係ない！」問題はもつと下のリンクなんです。プラットホームワーカーといわれていますが、ギグワーク（短い時間だけ働き、そこに継続した雇用関係が生じないことが特徴）だと、「とにかくスキマを埋めていく仕事を自分たちはやって、口に糊のりをしてカツカツで生き抜いている」と話されていました。

闘いしか解決の道はない

もう一つは、区議会議員選挙を戦った水摩議員に聞きました。水摩議員は区議会報告を駅頭宣伝で訴え、議会報告を定期的に配布してきました。その議会報告裏面に毎回「生活・労働相談」のお知らせを載せています。

それを見た40歳の女性から相談の電話が事務所にあつたそうです。「派遣の仕事をしてきたが、コロナ禍で派遣先の仕事が無くなり、最初の1〜2カ月は補償がさ

◆特集 春闘は生きている



れたが、その後は補償がされない。生活ができない。」という相談でした。水摩議員は、「ユニオンに加入していただいて、一緒に派遣元や派遣先と交渉して補償してもらおう方法があります」と答えたそうです。彼女は、「労働組合に加入してまではやりたくない!」と、即、解決とはなりませんでした。多分、水摩議員に相談した彼女は労働組合に失望しているか、あるいは闘いに不誠実な現実の労働組合に対して不信感をつのらせているのだと思います。その後も水摩議員は心配になり、ラインやメールなど

で随時、相談や連絡が取れる状態にしていたそうです。その彼女が言うには、「このように相談できるのはごくわずかな人であり、ほとんどの人は泣き寝入りさせられている」、とはつきり言っていたそうです。

このように、地方議員や行政の役割が重要であることを改めて実感させられた報告でした。

議員や行政だけでなく、私たちも一人ひとり、自分の周りに目を見開き、耳を立てて観察し、それらに寄り添って行動する大切さを学んだ瞬間でした。

しかし、あきらめてはいけません。労働者が労働者であることを自覚できるような組織が必要です。そしてもう一度、特集テーマ「春闘は生きている」を考え直すきっかけになればと思います。それは言うまでもなく労働組合です。労働組合に結集して「怒りを要求に」高める私たちの歴史的任務を強く感じています。現実に失望してしまうと「明日」を見つめなおす考え方や「目」がくるとしてしまいます。岸田首相が「新しい資本主義」などとうそぶいていますが、資本主義社会では解決できない問題があり、苦し紛れの言葉の遊びです。南米のチリの左派政権の誕生を見るまでもなく、歴史展開は発展途上にあるのですから。

(こばやし せいいち)